

第3学年〇組 国語科指導案

平成24年〇月〇日 (〇) 第〇校時
指導者

本校研究主題	主体的に学び、自分の思いを表現できる生徒の育成
本校研究副主題	言語活動を支える基礎・基本の習得と個別支援の活用を通して
教科研究主題	言語を通して的確に理解し、論理的に思考し、表現する力を身につける授業

1 単元名 豊かな言葉 「俳句の可能性・俳句十六句」

2 単元設定の理由

(1) 生徒観 男子*名、女子*名、計*名の学級である。どの教科に対しても学習意欲が高く、発言も積極的で、前向きである。国語科においても同様である。しかし、長文の読解や表現の問題には無回答も多く、論理的な思考と表現力にはまだ課題がある。より深まりのある読解力と自分の言葉で表現する力を身につけさせていく必要がある。
俳句は、短く簡潔な表現の中にも、多様なものの見方や感じ方をふまえ、豊かな世界を描く伝統的言語文化の一つである。さまざまな人と出会い、コミュニケーションをはかりながら大人社会に入っていくこの時期の生徒にとって、意義ある学習になると思われる。

(2) 教材観 本教材は、俳人である筆者の解説文「俳句の可能性」と、実際の俳句作品十六句によって構成されている。「俳句の可能性」は優れた俳句作品を例に、俳句の形式や約束事を分かりやすく解説しており、現代俳句のおおよそを把握することができる。また「俳句十六句」は個性豊かな作品が置かれており、俳句の魅力を十分に感じることができる。無季俳句や自由律俳句にも言及しており、近・現代俳句の概要と伝統文学として受け継がれるゆえんを理解する教材として適したものになっている。

(3) 指導観 俳句は江戸時代に確立され、以後の日本の代表的な短詩型文学として継承されている。世界にも知られる言語文化の一つである。定型や季語などの約束事を知るとともに、世界で最も短い詩である俳句の豊かな表現力に気付かせ、簡潔な表現と言葉に込められた作者の思いや見方、感じ方の違いを感じ取らせたい。
また、教材「俳句の可能性」で身に付けた力を活用する場として、基礎的・基本的な知識を生かし、鑑賞したり自分なりの評価をしたりする場を設定することで、俳句のより深い理解と、俳句を始めとするさまざまな作品に出会った時の批評する力を養っていきたい。

単元を貫く具体的な言語活動を位置付けた単元構成により、言語活動の充実を図っています。

3 単元(教材)の目標

- 俳句を読む楽しさを知り、想像を働かせながら読み味わおうとする。(関心・意欲・態度)
- 俳句を読み、季語や切れ字に注意しながら、具体的な言葉や表現に即して情景や心情を想像することができる。(読む)
- 表現の仕方を工夫して俳句の批評文を書くことができる。また、俳句の約束事を守って俳句を創作することができる。(書く)

4 評価規準

評価規準を設定し、単元及び本時の評価が確実にできるように計画しています。

学習内容	評価規準			
	国語への関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
○俳句の形式や約束事について知り、俳句表現の持つ味わいと可能性について考え、創作する。	・俳句を読み、自分の心をとらえた言葉や表現を書き抜こうとしている。	・俳句を鑑賞し、自分の見方や感じ方をふまえ、批評文を書いている。 ・表現方法を工夫して俳句を創作している。	・俳句の季語と季節を読み取り、作者の思いや俳句ができる時の場面を想像して読んでいる。	・1つ1つの言葉の意味を的確に捉え俳句の季語や表現方法について理解している。

5 指導計画（総時数6時間）

- (1) 「俳句の可能性」を読んで、俳句についての興味・関心を高め、俳句の基本的な約束事を知る。 ----- (1時)
- (2) 解説文中の五句の情景と心情を理解し、音読して味わう。 ----- (1時)
- (3) 「俳句十六句」を音読し、作品のリズムを読み味わう。 ----- (1時)
- (4) 各句の大意を理解し、情景をとらえ、表現の優れた点を鑑賞する。 ----- (1時)
- (5) 俳句の批評文を書く。 ----- (1時・本時)
- (6) 「俳句を創作しよう」を読み、自分で俳句を創作する。 ----- (1時)

単元の終盤に言語活動を位置付け、教材で身に付けた力を活用できるようにしています。

6 本時の構想

(1) 指導のねらい

- 「俳句大賞」を選考し、批評文（選評）を書く作業を通して、作品を分析する力と批評する力を身につけさせる。

(2) 生徒の目標

- グループで協力して「俳句大賞」を選考し、批評文（選評）を書こう。

(3) 本時と教科研究主題との関わり

本時は俳句についての基礎的な知識と鑑賞の仕方の学習を活用し、「俳句大賞」を選考することで論理的に思考し、「批評文を書く」ことで表現する力を身につけることをねらいとする授業である。この2つの活動そのものが教科研究主題につながるものとする。

また、本時の活動は、以前に学習した「説得力のある文章を書く」「批評の言葉をためる」とも結びつく活動となり、表現力を高めるための継続指導になると考える。

(4) 本時の基礎基本の内容と活用

① 言語活動における基礎基本のかかわり

今回の「批評文（選評）を書く」という言語活動においては、俳句に関する基礎的な知識と作品分析する力、そしてそれを話し合う段階において、伝えあう力と説明する力が活動を支える基礎基本の力として必要となる。それらが前時までの学習過程において、どれだけ習得されているかを学習計画表の自己評価によってよく把握するとともに、本時は導入段階でその確認を行っていききたい。

② 言語活動における個別支援の活用について

本時は、「俳句大賞」をグループで選考し、その批評文（選評）を完成させるという言語活動が中心となる。よって個別支援もその活動における支援が中心となる。さらに、活動は話し合い活動となるため、話し合いへの関わり方が支援の中心となる。前述の基礎基本の習得状況に応じて、それぞれが自信を持って発言したり、自分の考えを表現できるよう助言にあたりたい。

B基準に達しない生徒への具体的手だてを考えておくことが大切です。

(5) 本時の評価基準と具体的手だて

	A 十分満足	B おおむね満足	努力を要する生徒への手だて
関心 意欲 態度	積極的に課題を解決し、自分の考えをまとめようとしている。	課題を理解し、積極的に自分の考えを述べようとしている。	課題を理解し、自分の考えや感じ方を持つためのポイントを示す。
書く	「批評文（選評）」の書き方を理解し、積極的に表現している。	「批評文（選評）」の書き方のポイントについて理解し、自分の考えを表現している。	いくつかのポイントについて自分の考えを持たせ、他の友達の考えと比較したり、文章作成に協力したりさせる。
読む	作品に込められた作者の思いや情景を読み取り、分析的にとらえ、評価している。	作品に込められた作者の思いや情景を読み取り、分析的にとらえている。	作品を読み比べ、思いや心情の違い、表現方法の特徴などに気付かせる。
言語	作品に使われている語彙を正しく理解し、批評に生かしている。	季語と季節を正しくとらえ、作者の思いや情景の把握に生かしている。	季語と季節をとらえ、イメージを広げるような言葉かけと作品分析の手がかりとなる表現に注意させる。

7 指導過程

段階	学習活動・内容	時間(分)	形態	○支援 ◎主題との関わり ※手だて	達成基準
課題把握	1 「俳句十六句」を大きい声で音読する。	5	一斉	○ 前時までの学習を振り返り、思いや情景を思い浮かべながら音読させる。	B：本時の目標が理解できたか
	2 本時の目標と課題を把握する。 「俳句大賞」を 選考しよう。	3	一斉	○ これまでの学習を振り返り、身に付けた力を生かして、身近にある俳句作品から俳句大賞を選考する学習を行うことを知らせる。	
課題解決	3 選考の仕方と選考結果の報告の形について知る。 (1) 選考の仕方 A：夕立や大きな虹のプレゼント B：夕立や優しい人が怒るとき すぐれた句を選び、根拠を明らかにした批評文を書くことを言語活動として位置付けています。	10	一斉	○ 次のような形で進めることを確認する。 ① 2つの作品の分析を行う。 ・季語と季節 ・語彙(大意) ・主題 ・表現技法 ・表現の特徴(優れた点) ・不十分な箇所 ② 大賞の決定 ・選考の理由を明らかにしながらグループで話し合い、決定する。 ③ 選考結果を批評文(選評)の形にまとめる。 ・グループで批評文(選評)の形式を整えながら作文する。 ④ 模造紙に批評文(選評)を書く。 ○ 作品の分析をもとに、根拠をふまえ、「好き、嫌い」ではない評価をするようにさせる。 ○ 「批評の言葉をためる」の文章の中で重要な意味をもう一度振り返らせる。 ・「単なる好き嫌いの『批判』ではなく、・・・」 ・「『批評』とは自分なりの価値基準の根拠を明確にして・・・」 ○ 芥川賞の選考結果の例文を読んで聴かせる。	B：選考の仕方と批評文(選評)の書き方が理解できたか。
	4 グループに分かれて作品の分析と大賞の選考を行う。	15	グループ	○ あらかじめ決めておいたリーダーを中心に話し合わせる。 ※ A生徒への手だて 作品の分析を丁寧に行い、話し合いをリードするよう助言する。 ※ B生徒への手だて 自分の考えや感じ方を自信を持って発言するよう助言する。 ※ C生徒への手だて 分析の一つ一つのポイントについて考えを持たせるよう助言する。	B：進んで考え、発言しようとしているか。 すを具体的な付なけ支援計画
	5 選考結果を批評文(選評)の形に仕上げる。	10	グループ	○ 下書きに書いたものを推敲し、模造紙に大きく清書させる。 ○ グループの代表はこれを読み上げる。	
	6 お互いのグループの批評文(選評)を読んで感想を書き、授業を振り返る。 伝え合いによる深化・拡充をねらいとしています。	3	一斉個人	○ お互いのグループの批評文(選評)を読んで、感想を述べ合い、自分たちとは違う感じ方や考え方があることに気付かせる。 ○ 教師が補足し、批評文(選評)の評価をしながら学習活動のねらいについて話をする。	B：級友の発表に感想を持つことができたか。
まとめ	7 学習のまとめと振り返りをする。	3	個人	○ 自己評価表に記入し学習の振り返りをする。	
	8 次時の予告を聞く。	1	一斉	○ 次時は本時の学習を生かし、今度は自分が俳句を創作することを知らせる。	